

## ◇記念愛餐会祝辞

近藤勝彦先生



滝野川教会の皆さま、一二〇周年記念おめでとうございます。心からお祝いを申し上げます。

私が滝野川教会に参りましたのは一九五九年でした。翌年の一九六〇年に洗礼を受けました。その後、一九七〇年に東京神学大学を卒業して小岩教会に赴任しましたので、滝野川教会で育てられたのは一一年間、と

いうことになりません。赴任するにあたっては、一人の教会員を連れ去った、というか、妻となつた人が滝野川教会の会員でした。妻は女子聖学院の卒業生で、生粋の滝野川教会員でした。妻と出会つたのは、私が高校二年生、妻は一つ年下の高校一年生、その頃が最初の出会ひではないかと思ひます。そんなふうにして滝野川教会から妻を連れ去つて、同じ旧ディサイプルスの小岩教会に遣わされたわけです。

私が滝野川教会にいた今から六〇年前、一九六四年〜一九六五年頃だと思ひますが、滝野川教会は創立六〇周年を迎え、記念行事を行いました。当時のことを覚えておられる方はおりませうでしょうか。私の記憶に間違いがなければ、六〇周年記念では、渡辺善太先生をお招きしてご説教いただいたと思ひます。また渡辺先生はオルガニストの奥田耕天先生をお連れになり、奥田先生にはオルガンを弾いていただきました。渡辺先生は、

この教会のオルガンが初めてオルガンの音を出した、と仰つていましたが、それが六〇周年記念だったのでないかと私は記憶しています。その時の説教題「敵前感に生きる」も記憶しています。敵の前に生きる感覚、敵前感に生きる、という説教題は、いかにも渡辺善太流です。最初の言葉と、その仕草も覚えていません。「人間は……」、その後は覚えていないのですが、

(笑)。ギデオンの話でしたが、人間は、と言つた後、敵がいる、と続きました。また、水を手ですくつて飲む仕草を見せ、まるで講談師のような説教でした。後に続く内容は覚えていませんが、説教者の名前と、説教題と、そしてその仕草、それは鮮烈な印象を受けました。これ以後、渡辺善太の著書、特に彼の説教集を読むと、あの時のこと、あの時の感覚を思い起こします。六〇周年記念はもう一つの記憶があつて、聖学院小学校に行つて、いくつかのグループに分かれて話し合ひをした

ような思い出があります。もしかするとそれは六〇周年記念とは別かもしれませんが、当時はそのようなことをやつていたように思ひます。私の住まいは二年間、この滝野川教会でした。パプテストリーの隣の部屋で、宣教師の方のお世話により簡易ベッドをあてがわれ、私は二年間、この教会で生活させていただきました。私は家出をして、この教会に住んだわけです。その時に家出を手伝つてくれたのが奥山正彦兄、それから当時の名前で加藤さん、今は伊藤さん、それと私の妻が手伝つてくれました。奥山兄にはリアカーを引っ張つてもらひ、布団と本棚を持ち込みました。私を含め四人で部屋の掃除などしました。私は家出をして献身の志を表しましたが、そのような乱暴なことを、よく教会は許してくれたと思ひます。大木英夫先生ご自身も、弟さんと一緒に滝野川教会に住まれて神学校に通つていましたから、もしかすると教会はその経験があるので、

私と同じようにすることを許されたのかもしれない。また、今はそれほどではないと思いますが、あの頃は教会の中に聖学院関係の方々が多かつたせい、かなり同族的な感じはあったように思います。私はその壁をぶち破って入ってきた者、というように言われ方をされ、歓迎されました。私の後にも、壁をぶち破って入ってくる人が何人か続いたと思います。奥山兄もその一人です、阿久戸光晴先生などもそうでした。そんなことがあった教会ですから、とめどもなく溢れてくる思い出を話し始めると、いくらしゃべっても終わらないことになりま

す。今日は一二〇周年のお祝いの席ですので、この教会の良さについて少し触れたいと思います。滝野川教会の良さは、いくつかあります。もちろん一つは礼拝の説教です。私が滝野川教会に来た当初は高校生だったの

で、何を言っているか、ほとんど理解できませんでした。あの頃は仙台ご出身だった千葉儀一先生による東北弁でのご説教だったのですが、それが理由ではないと思います。要するに説教の内容のことなのですが、千葉先生は、キリスト教はご利益宗教ではない、ということをしきりに仰っておられました。けれども高校生の私は、ご利益のことを考えていませんでしたから、あまりピンと来ませんでした。今になってあの頃を思い返すと、いろいろ感じ、また考えさせられます。また大木英夫先生の名説教も、最初は良く理解できませんでした。私は一〇年ぐらい、大木先生の説教をよく理解できていなかったのですが、理解できない理由の一つに、礼拝中に他のことを考えている、ということもありました。高校生、大学生の頃は、礼拝に出席しながら他のことで悩んでいる、そういう時期がありました。そのうちに段々と、悩みや重荷は、教会で取り去ってもらおう、というよりは、教会に持ってきて「置く」ということ、そしてそれは教会の玄関に

置いても良いのですが、神さまの前に置いて、そして悩みやいろいろな問題から解放されて説教に聞き入る、ということに気づいていきました。私はなかなかそのようにできなかったのですが、静寂な礼拝の雰囲気はとも好きでした。その頃はなぜか礼拝堂の右側には男性、左側には女性、のような座り方していたような時代でしたけれど、礼拝特有の良さがありませんでした。

それから、私はすぐに献身の志が与えられたということとの関連かと思いますが、毎週の祈禱会には良く出席しました。出席人数は非常に少なく、今思い返すと常連の方たち七名から八名程度だったのではないかと思います。そこには千葉先生ご夫妻、大木先生ご夫妻、それから何人かの信徒の方がおられて、祈りを合わせます。私はある日の祈禱会の中で献身の思いを与えられました。その日の帰り道の光景のことは聖学院大学の礼拝で話し、また説教集にも掲載

しました。後に、聖学院大学で教授をしていた須山静夫先生より、その説教集を奥さまと一緒に家庭で読み、田端の駅の切通しの坂を、私は伝道者になろう、という思いで駆け降りる場面が思い描ける、とのお手紙をいただいたことがあります。

そして教会の交わり、その交わりの典型的な表現は、夏の修養会でした。とても良い修養会の時を過ごしたと思います。あの頃は大木先生が、クラスの友人であった左近淑先生を何度も修養会に呼んできました。旧約の話は普段はしにくい、というかできませんので、左近淑先生特有の旧約の話が修養会の中に入り、それがとても新鮮で良い修養会でした。私は後に東京神学大学のスタッフ、教授会のメンバーになり、かつての先生は同僚になる、そういう経験をしました。

これも本に書いたのですが、留学する時には大木先生のお世話で、アメリカのデイサイプルスから奨学金をいただきました。

た。おそらくその時、滝野川教会からも、私の旅費を出すためのカンパ、献金が募られたと記憶しています。そのようにして私は留学に行きました。千葉先生は留学中に亡くなり、帰ってきた時にはもうおられませんでした。留学から帰ってきて、あまり滝野川教会やデイサイプルスに役に立ったとは思っていませんが、要するに日本の教会に尽くせ、それがデイサイプルスからの献金に対する返礼だ、ということが私の心の中に沁み込んでいるのです。ですから私はそのようにしてきたつもりです。

こういう言い方をすると少し乱暴ではあるのですが、自分というものを考える時、いつも思うことがあります。現在私は銀座教会の協力牧師をしています。が、私自身はメソジストではありません。ちなみに妻は銀座教会に転会し、旧メソジスト教会の会員になっていますから、妻にはこの話を聞かせられません（笑）。また、長老主義教会で説

教奉仕をすることもありませんが、私のもともとの生まれは長老主義教会でもありません。結局、私自身の生まれは、旧デイサイプルス、この滝野川教会なのです。そのための性格がもうできあがっているのです。だから、恐らく非常に注意深い方が私の『キリスト教教義学』の本を読んだら、これは長老主義者でもない、メソジストでもない、これはいったい何者なのだろう、と考えるのではないかと思うのです。そしてこれは旧デイサイプルスの、ある意味敬虔主義的なグループの出身者で、その出身者は様々な神学を学びながら、このように書いているのではないか、そう見抜くのではないかと思うのです。私自身は自分をそのように見抜いています。そのことから言いますと、滝野川教会に通ったのは一年間でしたけれども、いろいろな意味で滝野川教会は私の母、母なる教会なのです。その後、小岩教会で三年間牧師をしました。あ頃は日本基督教

団も混乱のさなかにあつて、教師検定試験を受けることができませんでしたから、私は信徒として小岩教会に赴任しました。教会は私を牧師扱いしてくれましたが、聖餐式も洗礼式もすることはできません。それで毎週、千葉先生か大木先生が、小岩教会まで来てくれました。それは私が正教師になるまで、二年以上続きました。私の妻の母が車を運転して、千葉先生を乗せてきました。大木先生はご自分で来たのか、あるいは妻の母が乗せてきたのかもしれない。私の経験を数えあげると、母なる教会に対する恩義は相当なものがあると思えますが、これ以上いろいろ挙げるタイミングがないのでこのぐらいにして、お祝いの言葉でまとめさせていただきますと、まずはこの教会の礼拝の良さ、素晴らしさが挙げられます。これは礼拝する者たちの心構えだけではなく、司式をし、また説教する側の責任でもあります。そして私にとつて、青年期の自分を育てたのは

祈禱会でした。私自身も現在祈禱会に出席できないでいますから、人に言えた話ではありません。んし、私の経験でいうと、多くの皆さんにそれを求めるのは難しいと思いますが、千葉牧師夫人の祈りなど、今でも私は思い起こしますし、また大木先生の祈り、式服を着た祈りも、思い起こします。それから交わり、コミュニティ。聖徒の交わりに与っている、ということ。これまでも聖徒の交わりがありましたし、今でもあるだろうと思います。それはとても大事なものだと思えます。礼拝と祈禱会、そして聖徒、信徒同士の交わり、これを厚くしていくことが、この教会の宝なのではないか、そんなふうに通じています。今日は神学的な話ではなく、経験的な話をさせていただきます。辞になったでしょうか（笑）。本日は本当におめでとうござい

